

# 成人発達研究の動向と展望

岡本 祐子  
(1992年9月30日受理)

A Review and Some Considerations of Studies on Adult Development

Yuko Okamoto

This paper is a review and some considerations of studies on adult development. Recently, adult life is regarded as a period of development with the changes of life-cycle and life styles. However, the history of the studies on adult development is comparatively short. Mainly, Epigenetic Scheme by Erikson (1950) built a theoretical base for adult developmental studies, and empirical studies on adult development have been increasing since 1970's, for example Levinson (1978), Gould (1978), Vaillant (1977) and Sheehy (1974). Following points are suggested by these recent studies: ①there are common developmental process and characteristics in adult life. ②It is observed that there are some critical periods in psychological development such as middle age crisis or mid-life transition, and late adult transition. On the other hand, the developmental studies on adult identity, gradually increasing after 1980's, produce some important viewpoints to grasp psychological changes in adult lives in its totality.

## 1. はじめに

人生の最盛期であり、人間生涯の中で最も長い時期である成人期は、長い心理学研究史の中で、これまで発達の研究の谷間におかれてきた。発達心理学においては、いくつかの先駆的研究を除いて、ほぼ1960年代に至るまでは、人間の成長・発達の時期は、乳幼児期から青年期までであるとし、成人期はさらなる発達の時とは見なされていなかった。また、心の「発達」を成長のみならず衰退をも含めた広義の発達の視点に立脚してとらえても、成人期は規則的な変化は乏しいとされ、成人期に見られる変化は、個人差や個人のおかれた状況に対する適応として理解されてきた。

しかしながら、長寿化・少子化にともなうライフサイクルの変化や、価値観や生き方の多様化、個人個人の主体性にもとづいてライフスタイルや人生設計を決定し得る可能性の増大など、今日の時代的、社会的変化は、従来の成人観に見直しを迫り、成人期に見られる心理的变化も、発達の視点からとらえ直す必要があることを示唆している。今日においては、モラトリアム人間は青年期のみならず、成人初期から中年期にま

で拡大して見られ、自分らしい生き方やアイデンティティの模索は、成人期の人々にとっても共通の課題意識となっている。このような時代の潮流の中で、成人期は決して一様の平坦なものではなくなってきている。以上のような観点から見ると、成人期の発達の研究は今後発展されるべき重要な領域の1つであると思われる。

本稿では、成人期の発達に関する心理学的研究の動向を概観し、今後の展望について考察した。

## 2. 成人発達研究の課題

成人期の発達の研究の課題は、以下のような問題に集約することができると思われる。

- ① 成人期に見られる心理的变化のあらわれ方には、一定の順序が存在するのではないか。
- ② 各々の時期に見られる一般的な特徴は何か。成人期は、その時々状況に応じたできごとやそれに対する反応、適応という非累積的な一定の方向性のないものとしてとらえられるのか。あるいは、何らかの発達の方向性があるのかどうか。

- ③ 成人期におこる変化が、一定の発達の方向性をもったものとしてとらえられるのであれば、それはどの位、明瞭なものなのか。成人期は予期せぬできごとによって、その方向づけが弱められると考えられるのか。あるいは、それらによっては左右されない、あるいは一定の発達の規則があるのか。
- ④ 一定の発達の方向性が存在するのであれば、それは、それぞれ質的に異なる特質をもった一連の「段階」(Stage)として考えられるのか。
- ⑤ 成人期の変化は、何によっておこるのか。成人期の変化は、生物学的な要因によって規定されているのか。個々人の対人関係、役割の変化など、社会的な要因によるのか。あるいは、社会・文化的な相違をこえた自律的な心理のプロセスがあるのか。(Smelser & Erikson, 1980)
- ⑥ 成人期に見られる危機的現象にはどのようなものがあるのか。また、そのような危機が好発しやすい「危機期」は存在するのか。それらの危機期には、共通の特徴やプロセスがあるのか。
- まず、以下の3. および4. において、これらの問題に関して行われたこれまでの成人発達研究の流れを展望し、その問題点について検討した。

### 3. 初期の成人発達研究

成人期の発達に関する研究の系譜は、精神分析学と欧米の発達心理学者らによる生涯発達心理学の2つの流れをたどることができる。

#### (1) 精神分析学派による成人発達研究

精神分析学の創始者であるFreud (1905) は、心理-性的発達段階説を提唱し、幼児期の心理-性的発達が、後の成人期にも大きな影響を及ぼすことを明らかにした。Freudの理論は、以後、力動的人格発達論における主要な基礎理論となり、多くの後継者に受け継がれ、さらに発展せられていった。しかし、Freudの心理-性的発達論は青年期で完結しており、彼は、成人期以降の心理的葛藤は、幼児期以来抑圧されてきた無意識的な葛藤の再現と考え、成人期をさらなる発達の時期とは見なしてはいなかった。

それに対して、Jungは、人生後半期の発達に注目した最初の人物であり、今日の成人発達研究の祖と考えられる。Jung (1931) によれば、発達の根本的な変化は「人生の正午」である中年期におこり、それは外的世界への適応から自己の内的存在への適応の転換である。この中年期に始まり、ライフサイクルの後半期にわたって進む発達の過程を、Jungは「個性化の過程」(individuation process)、あるいは「自己実現 (self

realization) の過程」と呼び、人生の究極の目的と考えた。

一方、Erikson (1950) は、正統フロイト派の流れを受け継ぎ、誕生から死に至るまでの人間生涯全体を見通した人格発達の過程を8つの段階で表し、心の発達は青年期までにとどまらず、生涯を通じて達成されていくものであることを強調した(表1)。また、Erikson自身は実証的研究は行っていないが、アイデンティティは青年期に確立されてしまい、その後は固定的に維持されていくのではなく、生涯を通じて成熟、深化していくことを示唆している。

#### (2) 欧米の発達心理学における成人期研究

成人期の発達に関する第2の系譜は、欧米の発達心理学者らによるものである。成人期の発達や加齢に関する問題は、今日では乳幼児期から青年期までと同様に、科学的研究のテーマとなり、生涯発達心理学(life-span developmental psychology)という一領域を形成するに至っている。しかしながら、成人期が発達の研究の対象となったのは、第2次世界大戦前のいくつかの先駆的研究を除いては、ごく最近のことである。

Lerner (1986) によれば、Stanford (1902) によって発表された「精神の成長と衰退」("Mental Growth and Decay") という論文が、生涯全般にわたる発達の特徴を検討した最初の研究である。しかし、それ以降1920年代までは、成人期を対象とした発達の研究は行われていない。1920年代をむかえてようやく、古典的名著と言われているHallの"Senescence" (1922) に見られる老年期研究や、Hollingworth (1927) による精神的成長と衰退に関する発達の研究が行われている。1930年代には、Brünswik (1936, 1937) やBühler (1933) の伝記研究、Pressey, Janney & Kuhlen (1939) による研究が見られる。しかし、これらはそれぞれ単発的に行われ、引用された文献を見る限り、研究者間相互の知見の交換や討論はなされていないようである。これらの先駆的研究の中で、表1に示したBühler (1933) の業績は注目に値するものであろう。

1950年代に入って、より総合的な成人期研究が行われるようになった。Havighurst (1953) の提唱した発達課題論は、今日においてもなお心理学や教育学に広く影響を及ぼしている(表1)。Havighurstの発達課題論は、一定の展望のもとに人生を見ることを容易にした点ですぐれており、社会的側面を重視したこれらの課題は、後述するLevinson (1978) の理論にも示唆を与えたと思われる。しかし、これらの発達課題が人間の発達にとってどれだけ本質的、普遍的なものであるかについては、検討の余地を残している。さらに、

Neugartenら(1964)は、カンサス市に在住する40～70才の市民を対象に、面接や投影法を用いた大がかりな調査研究を行い、加齢にともなうパーソナリティの変化について分析している。この研究の中で彼女らは、加齢にともなって、関心が外的世界から内的世界へ向かうこと、自我の統制機能が能動型から受動型へ変化することなど、さまざまな側面からパーソナリティの変化を明確化している。

1950～1960年代にかけて行われたこれらの研究は、1970年代以降の成人発達研究に直接的な影響を与えるものとなった。特にそれまでの研究が、成人期も含む人生の各時期における単なるデータの収集であったものが、1950～1960年代を境に、発達過程や構造の変

化への探求に関心が変化していったことは、注目すべきであろう。

#### 4. 最近の成人発達研究

3. において概観した成人発達研究における2つの系譜は、1970年代以降、互いに影響を及ぼしあい、今日の成人発達研究の発展に大きく寄与している。中でもErikson(1950)の精神分析的人格発達分化の図式Epigenetic Schemetは、成人期の発達に関する理論的基礎を与えるものとなった。1970年代以降、Gould(1978)、Levinson(1974, 1978)、Sheehy(1974)、Vaillant(1971, 1977)らによって、それぞれの実証

表1 初期の成人発達研究から得られた各発達期の特徴と課題

発達期 研究者	青年期	成人初期	成人中期	成人後期
Bühler, C (1933)	発達の特徴(15-25才) 拡大期 ・さまざまな試行錯誤。 ・自分の目標に対する仮の決断と準備。	発達の特徴(25-45才) 最盛期 ・目標の具体化。 ・職業の選択。 ・配偶者の選択。 ・活力とエネルギーの最頂期。 ・仕事・活動における業績・人間関係の最頂期。	発達の特徴(45-65才) 維持期 ・体力の衰え・社会的活動のせばまりの始まり。 ・重要な喪失体験。 ・自分のなしたげたもの・成熟に対する満足感。 ・内省力の高まり・自己評価。	発達の特徴(65才-) 衰退期 ・身体への衰え。 ・退職。 ・自分の人生に対する満足と絶望の葛藤。 ・自分の人生の回想。 ・自分の死に対する準備と受容。
Erikson, E. H. (1950)	アイデンティティの確立 vs. アイデンティティ拡散 ・職業や価値観の確立を通して人生・社会における自分の役割の決定。 ・アイデンティティの獲得。 vs. ・社会における自分の役割や位置づけに対する確信のなさ。 ・アイデンティティの拡散・混乱。	親密性 vs. 孤立 ・他者との親密な関係の発達。 ・他者のアイデンティティとの融合。 vs. ・親密性の忌避。 ・孤立・疎外。 ・自己を他者に与える能力の欠如。	生産性・生殖性 vs. 停滞 ・自分の生み出したものをよくみ育てること。 ・より若い世代を教え導くこと。 vs. ・自己の関心・欲求へのとらわれ・没入。 ・生産性のなさ・停滞感。	自我の統合 vs. 絶望 ・過去に達成したことへの満足感。 ・自分の人生の受容。 ・自我(人格)の成熟・統合。 ・若い世代に対する信頼感。 vs. ・人生の無意味感と疎外感。 ・死の恐怖・絶望。
Havighurst, R. J. (1963)	発達課題 1. 同年齢の男女との間に新しいより成熟した関係を結ぶこと。 2. 男性(女性)としての社会的役割の達成。 3. 自分の身体を受容し、有効に使うこと。 4. 両親や他の大人からの情緒的自立。 5. 結婚と家庭生活の準備。 6. 職業生活の準備。 7. 行動の指針としての価値観を身につけること。 8. 社会的に責任ある行動を求め、それをなしとげること。	発達課題 1. 配偶者の選択。 2. 配偶者との生活を学ぶ。 3. 第1子を家庭に加えること。 4. 子供を育てること。 5. 家庭を管理すること。 6. 職業につくこと。 7. 市民的責任を負うこと。 8. 選んだ社会集団を見つけること。	発達課題 1. 大人としての市民的・社会的責任を達成すること。 2. 一定の経済的水準を築き、維持すること。 3. 10代の子供達が大人になるための援助。 4. 大人の余暇活動の充実。 5. 自分と配偶者が人間的に結び付くこと。 6. 中年期の身体的・生理的変化の受容と適応。 7. 老いた両親への適応。	発達課題 1. 体力と健康の衰退への適応。 2. 現役引退・収入の減少への適応。 3. 配偶者の死への適応。 4. 同年代の人々と明るく親密な関係を結ぶこと。 5. 社会的・市民的義務をひきうけること。 6. 肉体的な生活を満足に送れるよう準備すること。
Peck, R. C. (1965)			1. 知恵の尊重 vs. 体力の尊重。 2. 社会的人間関係 vs. 性的人間関係。 3. 情緒的柔軟性 vs. 情緒的貧困さ。 4. 精神的柔軟性 vs. 精神的硬直さ。	1. 自我の分化 vs. 仕事役割への没入。 2. 身体を超越 vs. 身体への没入。 3. 自我を超越 vs. 自我への没入。

表2 最近の成人発達研究

発達期 研究者	青年期	成人初期			成人中期				成人後期
Levinson, D. J. (1978)	成人への過渡期 (17-22才) ・未成年時代の自分の位置・自分にとっての重要な人物・集団・制度などの関係の修正。 ・成人としての可能性の模索、暫定的選択。 ・成人としての最初のアイデンティティの確立。	大人の世界へ入る時期 (22-28才) ・自分と大人の社会をつなぐ仮の生活構造を作る。 ・職業・異性・仲間関係・価値観・生活様式などの初めて選択したものへの試験的な関与。 ・人生の「夢」への展望。	30才の過渡期 (28-33才) ・現実に応じた生活構造の修正。 ・新しい生活構造の設計。 ・重要な転換点 (30才代の危機) ・ストレス大	一家を構える時期 (33-40才) ・安定期。 ・仕事における自己拡大 ・昇進 ・活力大、生産性。 ・自分にとって最も重要なもの (仕事・家族et c.) に全力を注ぐ。 ・指導者との関係の限界。	人生半ばの過渡期 (40-45才) ・重要な転換点。 ・人生の目標や夢の再吟味。 ・対人関係の再評価。 ・体力の衰えへの直面。 ・これまで潜在していた面を発揮する形で生活の修正。	中年に入る時期 (45-50才) ・安定感の増大。 ・成熟・生産性。 ・生活への満足感。	50才の過渡期 (50-55才) ・現実の生活構造の修正。 ・転換期。	中年の最盛期 (55-60才) ・中年期第2の生活構造を築き上げる。 ・中年期の完結・目標の成就。 ・安定性。	老年への過渡期 (60-65才) ・老年期へ向けての生活設計。
Sheehy, G. (1974)	根をひきぬく時期 (18-20才) ・独立と自律への欲求。 ・アイデンティティの確立・役割の混乱。	試練の20代 (22-28才) ・生活パターンの形成。 ・将来展望や目標の形成模索。 ・年齢相応の期待への省察。 ・活力。	30代への過渡期 (28-32才) ・不安定感の増大。 ・積極的関与するものの再評価。 ・自己拡大への欲求。	根つきと自己拡大 (32-35才) ・生活の構造化・安定化。 ・仕事の上での自己拡大。 ・家族への関心の増大。 ・社会生活への適応。	「締め切り」の10年 (35-45才) ・残された時間のせままり。 ・体力の衰え・不安定さ・切迫感の増大。 ・人生の目標の再吟味。	再生かあきらめか (45-50才) ・新たな人生の意味の発見。 ・満足感・脱錯覚による不満・絶望。			
Gould, R. L. (1978)	発達の特徴 (16-22才) ・自立への欲求 ・生家族からの自立の準備。 ・将来への漠然とした構想。 ・大人の世界へ入るための準備。 ・仲間志向性。	(22-28才) ・有能さや統制力への欲求。 ・仕事における自己拡大の始まり。 ・自己に対する自信。	(29-34才) ・30才の転換点 (危機) ・自分が積極的関与しているものの再評価。 ・第2の青年期。 ・37才の「中年危機」 ・結婚生活への満足感は低い。	(35-42才) ・価値観や自分が積極的関与しているものの再評価。 ・残された時間の限界の認識。 ・第2の青年期。 ・37才の「中年危機」 ・結婚生活への満足感は低い。	(43-50才) ・自己内部での受容。 ・あきらめ。 ・安定性の増大。 ・対人関係への関心の再増大。 ・経済的関心の減少。	(50才-) ・安定性の増大。 ・健康・成熟性・時間への関心。 ・達成したものに満足感の増大。 ・結婚生活への満足感の増大。			
Vaillant, G. E. (1977)	発達の特徴 (20-30才) ・結婚・対人関係が活力の基本的源泉。 ・親密性が中核的関心。	発達の特徴 (30-40才) ・職業における成功・昇進や自己の向上が基本的な関心。 ・仕事における地固め。 ・よき指導者・相談者との関係の重要性。	発達の特徴 (40-50才) ・「第2の青年期」 ・中年期危機期。 ・抑鬱感の増大。 ・家族への関心の再増加。						
Jaques, E. (1965)				中年期危機期 (35-45才) ・成熟した成人期への移行期。 ・「個人的な死」の認識。 ・死の絶望と誓の徹底操作。 ・人間と自己の不完全さ・有限性の受容。			成人後期の危機期 ・老年期への移行。		

的研究にもとづく独自の発達段階説が発表され、人間生涯全体を発達の視点から見る視座が確立されつつある。その主要な知見は、表2に示した。これら最近の研究によって、成人期においても、パーソナリティや個人々の意識や目標のあり方など、さまざまな次元で、一般の人々に共通して見られる変化過程が存在することが明らかにされている。これらの研究成果は、成人期の各発達期には、生活構造の発展 (Levinson, 1978)、人格の「変容」(transformation, Gould, 1978)、自我機能の成熟 (Vaillant, 1977) などが見られるという、より全人格的な変化の過程を見出した点で評価することができる。Freud (1905) が、人生後半期は人格的発達や変化の可能性は乏しいと考えたのに対して、最近の成人発達研究は、人生後半期においても積極的な創造や人格の成熟の可能性を示唆している。以下に、これらの研究から導き出された主要な知見を紹介した。

#### (1) 生活構造の発展：Levinson, D. J.

Levinson (1974, 1978) は、4つの職業群に属する40人の中年男性の個人史を分析し、表2のような成人期の発達段階説を提唱した。彼は、この発達変化の基本を、個人の「生活構造」(life structure, 「ある時期におけるその人の生活の基本的パターンないし設計」) の変化であるとしている。Levinson (1978) は、この生活構造の概念を用いて、個人と外界の相互関係を分析し、①各人の生活構造は、成人期に比較的順序正しい段階を経て発達していくこと、②成人期の生活構造の発達、安定期(生活構造が築かれる時期)と、過渡期(生活構造が変わる時期)が交互に現れて進んでいくことを見出した。この基本的概念をもとに綿密な面接調査を行った結果、Levinson (1978) は、成人期には40-45歳の人生中間の移行期 (Mid-life transition) と60-65歳の成人後期移行期 (Late Adult Transition) という2つの大きな転換期が存在するとしている。

また、米国の女流ジャーナリストSheehy, G. (1974) もLevinsonと同時期に独自の面接調査を行い、成人期の発達段階についてはほぼ同様の結果を得ている(表2)。

#### (2) 人格の「変容」(Transformation)：Gould, R. L.

Gouldも、精神科医としての臨床経験から、成人期にも心理的な転換期が存在することに注目した一人である。Gould (1978) は、成人期の発達を、子供時代に由来する誤った信念を一つ一つ捨て去り、現実的に成熟した成人意識 (adult consciousness) を獲得していく過程とするユニークな理論を提唱している。彼によれば、本当の意味で成人になり得るのは中年期以降

のことであり、一連の「変容」を経た後のことである(表2)。

#### (3) 自我機能の成熟：Vaillant, G. E.

Vaillant (1971, 1977) は、1937年から始められた「成人発達に関するグラント研究」を引き継ぎ、95名の男性を対象とした30年以上にわたる縦断的研究をもとに、自我機能の発達変化を検討している。彼の一連の研究は、自我の防衛機制の概念をもとに、自我機能を未熟から成熟に至る階層の中に位置付け、発達の視点から精神的健康について論じたものである。彼の研究によると、20歳から35歳の間に自我の防衛機制は、未熟なもの割合が減少し、成熟したものの割合が増加している。

Vaillant (1977) は、この研究の調査対象者の幼児期から中年期に至るまでの生育歴をもとに、アメリカ社会における成人期のライフサイクルについても言及している。その中で彼は40代に注目し、この時期を、抑鬱感が増大し、再びアイデンティティの危機が訪れる「第2の青年期」であると述べている(表2)。

#### (4) 最近の成人発達研究結果の共通点と相違点

以上、概観してきたこれらの研究は、研究者によって理論的背景や発達の視点は異なるが、得られた成果を検討すると、次のような共通の見解が見出される。

- ① 成人期にも共通に方向づけられた発達過程が見られる。
- ② 成人期の発達過程の中には、転換期 (Gould, 1978)、移行期 (Levinson, 1978)、危機期 (Vaillant, 1977; Jaques, 1965) と呼ばれる急激に心理的变化のおこりやすい時期が存在する。
- ③ その心理的転換期、あるいは危機期は、ほぼ30代後半から40代の中年期と、60歳前後の老年期への移行期である。

最近の成人発達研究には、以上のような共通の知見が見られる一方、今後検討されるべき問題点として、次のような見解の相違点も存在している。その中核的問題は、成人期に見られる諸変化をどの次元でとらえるのかという問題である。Levinson (1978) は、成人期のそれぞれの発達段階を、年齢と密接に結びつけたもの ("Age-linked developmental period") であると述べている。それに対して、Neugarten (1979) は、一般に共通した発達の方向性よりも個人特性のウエイトの方が大きいとしている。両者の見解は、きわめて対照的であり、これまで紹介してきた各々の研究が立脚している発達観は、図1のように、年齢 (Levinson) および、個人特性 (Neugarten) を両極とする連続体 (continuum) の上に位置づけられることになる。この問題は、2. で述べた成人期研究の課

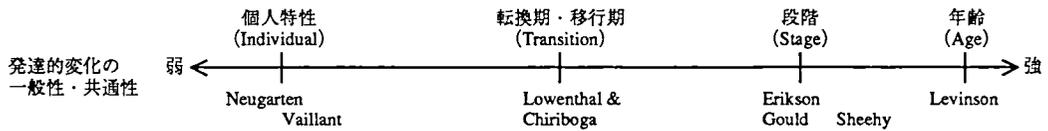


図1 成人期の発達を説明する鍵概念

題のうち、第3、第5の問題点とも深く関連している。

このような見解の相違が生じた一因として、次のことが考えられる。第1は、成人期の全人格的な発達過程を明確化するためには、研究方法として綿密な面接調査法をとることが不可欠である。必然的に、調査対象者は少なくなりがちであり、多くの研究は比較的少数の対象者から得られたデータで結果が導き出されている。この点に関しては、今後、さまざまな階層に属するより多くの対象者によって、それぞれの研究から導き出された発達論の普遍性が検討されねばならないと思われる。

第2は、開拓的研究の宿命とも考えられるが、それぞれの研究の発達過程のとらえ方や分析法は、研究者の理論的背景を深く反映させたものになりやすい。したがって、これらの知見の相違は、研究者自身の発達観の相違そのものであるとも考えられる。今後、理論的背景から研究手法、データの分析法に至るまで、さまざまな次元で研究成果の交換と検討を深めていく必要があるだろう。

## 5. アイデンティティ論に立脚した成人発達研究

1980年代以降、今日の成人発達研究の一領域を形成しつつあるものに、成人期を対象としたアイデンティティ研究があげられる。上述のように、Erikson (1950) は、発達の視点から人生全般を理解する理論的基礎を提供し、特に最近の成人発達研究に大きな影響を及ぼしてきた。しかし、Erikson自身の主要な関心とErikson以降のアイデンティティ研究の主流は青年期にあり、成人期を対象にしたアイデンティティ研究はこれまで僅かであった。しかしながら、1980年代以降、成人期のアイデンティティを発達の視点から考察した研究も少しずつ増加してきている。以下に、その主要なものを紹介した。

### (1) Eriksonのアイデンティティ発達論そのものを検討した研究

Eriksonのアイデンティティ理論を発展させ、特に青年期のアイデンティティ形成の研究にすぐれた視点

と研究方法を提供したものとして、Marcia, J. E. (1964) のアイデンティティ・ステータス論があげられる。Marcia (1976) は、大学生のアイデンティティ・ステータスと、大学卒業6年後のステータスを縦断的に研究した結果、青年期のアイデンティティ・ステータスは変動しやすく、短期間しか一定しないことを見出した。この結果から、Marciaは青年期以降のアイデンティティ・ステータスの変化過程を検討することの重要性を強調しているが、彼自身はこの問題に関しては実証的研究を行っていない。

Whitbourne (1979), Waterman (1982) は、Marciaのこの提言をもとに、青年期から成人期への移行期におけるアイデンティティ・ステータスの発達経路に関するモデルを発表している(図2, 図3)。彼らは、青年期から成人期への移行期を念頭において、それぞれのモデルを組み立てているが、これらは成人期のアイデンティティ発達過程を検討する重要な手がかりとなると考えられる。

Andrew (1983) は、Eriksonの著作にもとりあげられているLutherの生産や、Levinson (1978), Gould (1978), Vaillant (1977)の研究を検討した上で、Eriksonの個体発達分化の図式の第VI段階の次に、関係性対社会的引きこもり (Relatedness vs. Social Withdrawal), 強化・地固め対断片化 (Consolidation vs. Fragmentation) という2つの新しい成人期の段階を付加する必要があると主張している。Andrewの新しい2段階の付加によって、人間生涯は10の段階に区分されることとなる。彼は、この「拡大個体発達分化の図式」(Extended Epigenetic Scheme)を2つのレベルに分割し、はじめの第I～第V段階は、発達の基盤となる第1レベル、第VI～第X段階は、それにもとづいた発達の第2レベルを形成しており、第2レベルの発達の根は、それぞれ、VI親密性はI基本的信頼感に、VII関係性 (Relatedness) はII自律性に、VIII強化・地固め (Consolidation) はIII自主性に、IX生殖性・生産性はIV勤勉性に、X自我の統合はVアイデンティティの獲得に、対応しているというユニークな理論を提唱している。

### (2) 中年期に関する研究

中年期がアイデンティティの危機期であることにふ

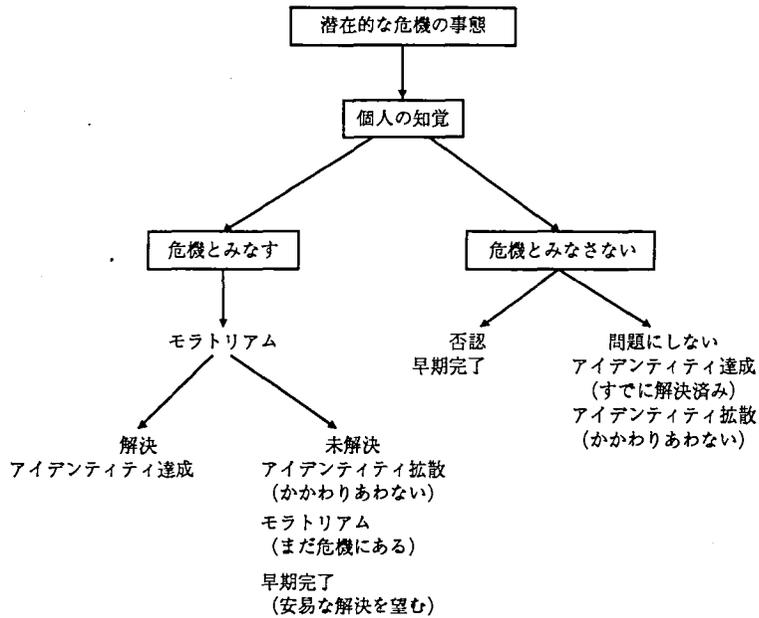


図2 アイデンティティ・ステータスの発達過程 (Whitbourne, 1979)

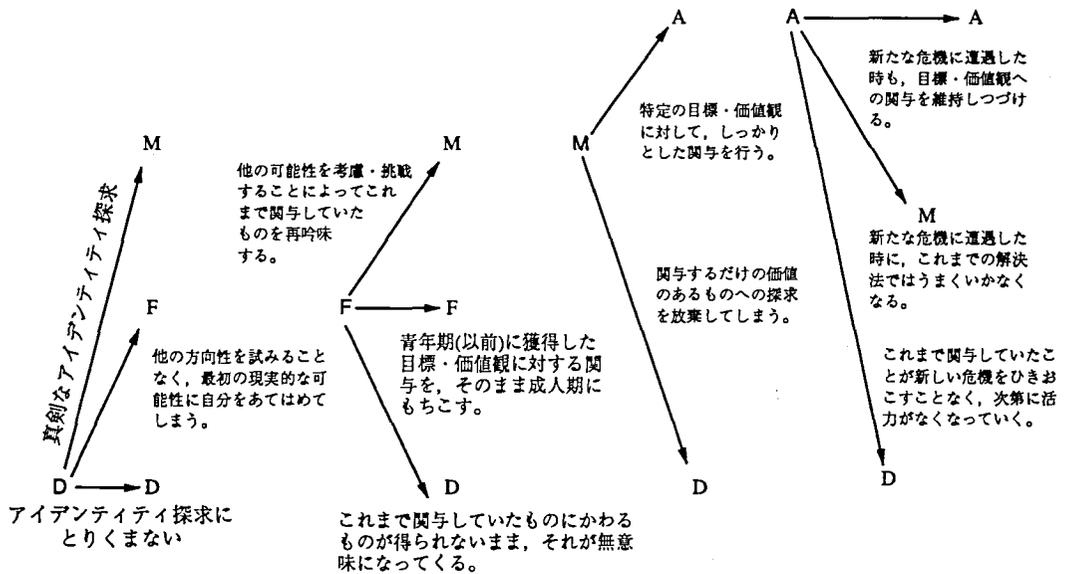


図3 アイデンティティ発達の連続的パターンのモデル (Waterman, 1982)

(注) A: アイデンティティ達成, M: モラトリアム, F: 早期完了, D: アイデンティティ拡散

れた論文は、少なからず見られる(例えば, Lowenthal & Chiriboga, 1972; Rosenberg & Farrell, 1976) が、それを実証的にとりあつた研究は少ない。

Ellett (1982) は、子育てを終えた後の「空っぽの巣」状態にある専業主婦を対象に、アイデンティティと母親役割の喪失、自己評価 (self-esteem) の関連性

について検討している。その結果、すべての調査対象者は、「空っぽの巣」に関連したアイデンティティ危機を体験していた。そして、この時期のアイデンティティ危機は、母親役割の喪失の結果としておこり、自己評価を低下させることを見出している。また、Shainess (1977) は、臨床経験の考察から、対象喪失

という心理的危機は、個々人の自律性を脅かし、アイデンティティへの脅威をもたらすこと、また、その危機は発達初期の問題に端を発していることを明確化している。

また、職業や家庭における成人期のさまざまな役割への関与や葛藤をアイデンティティの視点から検討した研究 (Hornstein, 1986; Thoits, 1986; Powell, 1989) も重要である。

成人期のアイデンティティ研究は、成人期の発達を全人格的な視点からとらえるものとして、非常に重要な領域であると思われる。しかしながら、成人期全般を見通したアイデンティティ発達に関する研究は、欧米においてはまだ行われていない。また、老年期を対象としたアイデンティティ研究も、1980年代以降少しずつ増加しつつあるが、老年期の発達に関する研究の展望は、別の機会に譲りたい。

## 6. 我国における成人期の発達に関する研究

我国における成人発達研究は、欧米諸国に比べてさらに草創期にあると言わざるを得ない。先駆的研究としては、落合 (1980) による成人期の各年齢に感じられる意識を人生の転換期という視点から分析した研究

が見られるが、成人期の心理の現象的記述にとどまっている。

岡本は、その一連の研究 (岡本, 1982, 1985; 岡本・山本, 1985; 岡本, 1986, 1991a, b) において、成人期におけるアイデンティティの発達過程、および成人期のアイデンティティの成熟にかかわる要因について検討している。まず、岡本 (1985, 1986) は、中年期のアイデンティティ危機と発達の様態を分析した結果、40代前半を中心とする中年期のアイデンティティ危機は、I 身体感覚の変化にともなう危機期、II 自己の再吟味と再方向づけへの模索期、III 軌道修正・軌道転換期、IV アイデンティティ再確立期というプロセスを経て、再体制化されていくことを見出した。さらに、老年期への移行期としての定年退職体験を分析した結果、定年退職に対して、積極的歓迎型、受動的歓迎型、危機型等、7タイプが見出され、定年退職にともなう自己内外の変化の体験を自己の重要な問題として主体的に受けとめ、解決して行くかどうか、アイデンティティ達成を決定するものであることが示唆された (岡本・山本, 1985)。

これらの一連の研究より、青年期に獲得されたアイデンティティは中年期および定年退職期に再び危機を迎え、再吟味と再方向づけがなされて、再度アイデンティティが達成されること、成人期のアイデンティティ

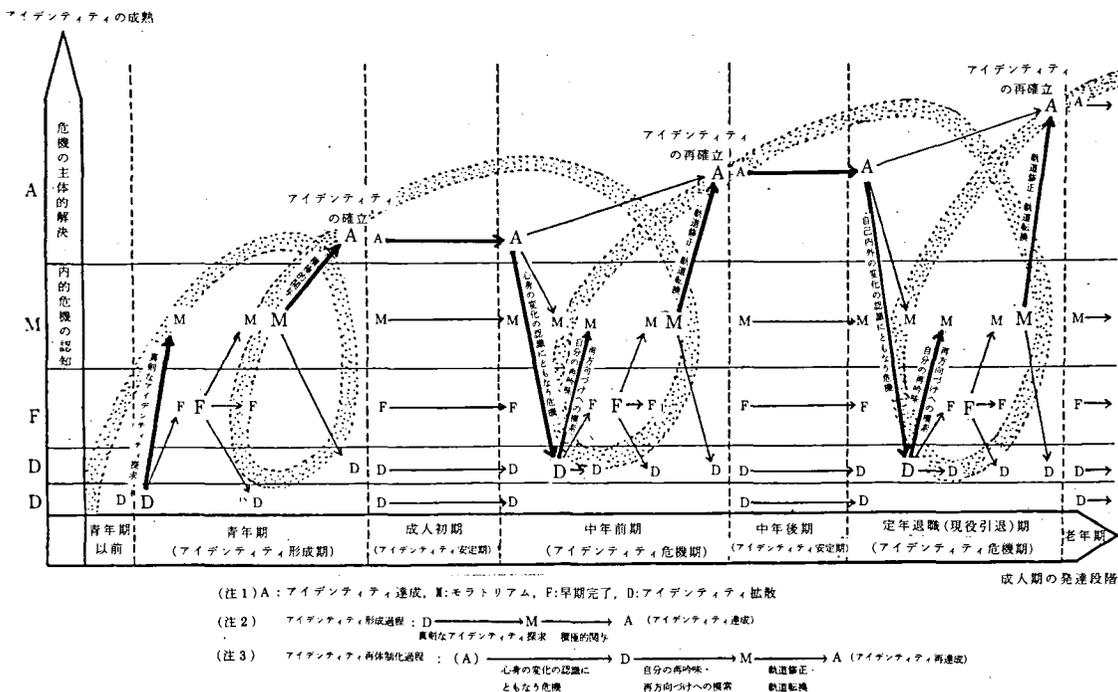


図4 アイデンティティのラセン式発達モデル (岡本, 1991b)

イの成熟にかかわる要因としては、成人期以前の心理社会的課題の達成、自我機能の高さ、また心理的危機期の主体的模索が深く関係していることが明らかにされた。岡本(1991 b)は、これらの結果より、Erikson, Levinson等、従来の成人発達研究が、段階を昇るような発達段階を想定しているのに対して、発達の過程はむしろ、同一主題を反復的に繰り返し、ラセン的に進行するのではないかと仮定する図4のような「アイデンティティのラセン式発達仮説」を提出している。

## 7. 今後の課題と展望

成人期の発達の研究は、現段階ではまだその途にいたばかりであり、今後、検討されるべき多くの課題を残している。特に、2. で掲げた6つの問題は、基礎的研究課題として、今後もさまざまな角度から検討を重ねていく必要がある。それに加えて、次の2つの問題は、今後の成人発達研究の発展の方向性として、非常に重要であると思われる。

第1は、成人発達における性差、あるいは成人女性の発達の特徴の解明である。成人期のアイデンティティ発達には、女性特有の問題が数多く存在することが指摘されている(例えば、Hopkins, 1980; O'Connell, 1976; 岡本, 1991 a)。現代社会において、特に女性のライフサイクルの変化が著しい今日、成人女性の発達過程を実証的に解明していくことは、重要な課題であろう。

第2は、ライフサイクルの最終段階である老年期のアイデンティティや心理の様態と成人期の発達との関連性の検討である。老年期研究は、高齢化社会を迎えつつある今日の我が国の状況から見ても、多くの重要な課題を含んでいる。特に、老年期の心理・社会的課題の達成、精神的自立や精神的充足感の獲得は、老年期に至ってすぐに達成されるものではない。したがって老年期研究は、成人期全般を見通した広い視野に立って進めていくことが必務であり、成人発達研究は、老年期のこれらの課題に対しても重要な知見を提供するものであると思われる。

## 引用文献

- Andrews, L. E. 1983 A Theoretical Expansion of Erikson's Psychosocial Theory : On the Necessity for Postulating Two Additional Adult Stage of Development. Unpublished Doctoral Dissertation, California School of Professional Psychology, L. A.
- Brünswik, E. F. 1936 Studies in Biographical Psychology.

- Character & Personalities, 5, 1-34.
- Brünswik, E. F. 1937 Wunsch und Pflicht im Aufbau des Menschlichen Lebens. In C. Bühler & E. Frenkel (Eds.) Forschungen über den Lebenslauf, 1. Vienna : Gerold.
- Bühler, C. 1933 Der menschliche Lebenslauf als psychologisches Problem, Leipzig : S. Hirzel. 2nd ed. Göttingen : Verlag für Psychologie, 1959.
- Ellett, S. E. 1982 An investigation of identity and self-esteem in traditional married women during their middle years, and the impacts of the life planning seminar. Dissertation Abstract International, 42, 7-B, 2969-2970.
- Erikson, E. H. 1950 Childhood and Society. New York : Norton. (仁科弥生 訳 1977, 1980 幼児期と社会みすず書房)
- フロイト, S. 1905 性欲論三篇。(懸田克躬・高橋義孝(訳) 1969 フロイト著作集 第5巻, 性欲論・症例研究。人文書院, Pp. 7-94)
- Gould, R. L. 1978 Transformations : Growth and Change in Adult Life. New York : Simon & Schuster.
- Hall, G. S. 1922 Senescence : The last half of life. New York : Appleton & Co.
- ハヴィガースト, R. J. 荘司雅子(訳) 1958 人間の発達課題と教育 牧書店 (Havighurst, R. J. 1953 Developmental Tasks and Education. New York : McKay.)
- Hollingsworth, H. L. 1927 Mental Growth and Decline : A Survey of Developmental Psychology. New York : Appleton.
- Hopkins, L. B. 1980 Inner space and outer space identity in contemporary females. Psychiatry, 43, 1-12.
- Hornstein, G. A. 1986 The structuring of identity among midlife women as a function of their degree of involvement in employment. Journal of Personality, 54, 551-575.
- Jaques, E. 1965 Death and the mid-life crisis. International Journal of Psychoanalysis, 43, 502-514.
- Jung, C. G. 1931 The stages of life. In The Collected Works of Carl G. Jung, Vol. 8, Princeton University Press, 1960.
- Lerner, R. M. 1986 Concepts and Theories of Human Development. New York : Random House.
- Levinson, D. J. 1974 Periods in the adult development in men : Ages 18 to 45. Counseling Psychologist, 6, 21-25.
- Levinson, D. J. 1978 The Seasons of Man's Life. New York : Alfred A. Knopf. (南博 訳 1980 人生の四季 講談社)

- Lowenthal, M. F. & Chiriboga, D. 1972 Transition to the empty nest : Crisis, challenge, or relief? *Archives of General Psychiatry*, 26, 8-14.
- Marcia, J. M. 1964 Determination and Construct Validity of Ego Identity Status. Unpublished Doctoral Dissertation, The Ohio State University.
- Marcia, J. M. 1976 Identity six years after : A follow-up study. *Journal of Youth and Adolescence*, 5, 145-160.
- Neugarten, B. L. 1964 *Personality in Middle and Later Life*. New York : Atherton Press.
- Neugarten, B. L. 1979 Time, age, and the life cycle. *American Journal of Psychiatry*, 136, 887-894.
- 落合幸子 1980 人生の転換期の心理 筑波大学心理学研究, 2, 111-124.
- O'Connell, A. N. 1976 The relationship between life style and identity synthesis and resynthesis in traditional, neotraditional, and nontraditional women. *Journal of Personality*, 44, 675-688.
- 岡本祐子 1982 成人の心理・社会的発達に関する研究 (3) : 成人期のライフパターンの分析 広島大学大学院教育学研究科博士課程論文集, 8, 110-119.
- 岡本祐子 1985 中年期の自我同一性に関する研究 教育心理学研究, 33, 295-306.
- 岡本祐子・山本多喜司 1985 定年退職期の自我同一性に関する研究 教育心理学研究, 33, 185-194.
- 岡本祐子 1986 成人期における自我同一性ステータスの発達経路の分析 教育心理学研究, 34, 352-358.
- 岡本祐子 1991a 成人女性の自我同一性発達に関する研究 広島中央女子短期大学紀要, 28, 7-26.
- 岡本祐子 1991b 成人期における自我同一性の発達過程とその要因に関する研究 広島大学学位論文
- Peck, R. C. 1955 Psychological development in the second half of life. In B. L. Neugarten (Ed.) 1968 *Middle Age and Aging*. Chicago : University of Chicago Press.
- Powell, G. N. & Posner, B. Z. 1989 Commitment to career versus family/home life : Effects of sex, sex-role identity, and family status. *Psychological Reports*, 64, 695-698.
- Pressey, S. L., Janney, J. E. & Kuhlen, R. G. 1939 *Life : A Psychological Survey*. New York : Harper & Row.
- Rosenberg, S. D. & Farrell, M. P. 1976 Identity and crisis in middle aged men. *International Journal of Aging and Human Development*, 7, 153-170.
- Shainess, N. 1977 Treatment of crisis in the lives of women : Object loss and identity threat. *American Journal of Psychotherapy*, 31, 227-237.
- Sheehy, G. 1974 *Passages : Predictable Crises of Adult Life*. New York : Dutton & Co. (深沢道子 訳 1978 パッセージ : 人生の危機 プレジデント社)
- Smelser, N. J. & Erikson, E. H. 1980 *Themes of Work and Love in Adulthood*. Mass. : Harvard University Press.
- Stanford, E. C. 1902 Mental growth and decay. *American Journal of Psychology*, 13, 426-456.
- Thoits, P. A. 1986 Multiple identities : Examining gender and marital status differences in distress. *American Sociological Review*, 51, 259-272.
- Vaillant, G. E. 1971 Theoretical hierarchy of adult ego mechanism of defense. *Archives of General Psychiatry*, 24, 107-118.
- Vaillant, G. E. 1977 *Adaptation to Life*. Boston : Little, Brown.
- Waterman, A. S. 1982 Identity development from adolescence to adulthood : An extension of theory and a review of research. *Developmental Psychology*, 18, 341-358.
- Whitbourne, S. K. 1979 *Adult Development : The Differentiation of Experience*. New York : Holt, Rinehart & Winston.